

きょういく

きょういく アイ



KAIRYUDO
vol.3-03

— Information for Boards of Education —

巻頭言

書の魅力

書道家 武田 双雲



僕は書道家として活動していますが、2000年まではNTTに勤めていました。その時25歳。実を言うと、会社を辞める寸前まで、書道家になることなんて少しも考えていませんでした。幼い頃から母親に書道を習い、趣味として書道を続けてきましたが、まさか自分が書道家として活動するなんて想像もしていませんでした。会社では、いろんな新しい経験をさせてもらって、それなりに楽しむことができていました。しかし漠然とした不安と本当にこのままの人生でいいのだろうかという疑問がどんどんわいていました。

ちょうどその頃、社会人になってはじめて久々に実家の熊本に帰省しました。実家の玄関を開けて、最初に目に飛びこんできたのが、母親が直接書いた襖の書でした。その書がガツンと僕の心を打ちました。母親の書は幼い頃から見慣れているのになぜか、その時ははじめて出会ったような衝撃で鳥肌が立っていたのをはっきりと覚えています。

そのことがきっかけとなり、僕は書道家として独立す

ることを決意したのです。しかし独立してはみたものの、お金が稼げないだけでなく、何度書いても母親のような潔く、かっこいい書が書けなく

て、苦しみました。もがいてももがいても、前に進んでいる気がしません。悩みました。でも悩んでいたって何も変わらないことに気づき、とにかくやれることから実行してみることにしました。

まずやったことは、路上で書を書くこと。他人の前で書くことにより、より集中力が鍛えられると思ったからです。しかし、路上は予想以上に厳しく誰も足を止める気配がありません。そこで、書の魅力について改めて考え抜きました。そこで書の魅力に気づき、それをもっと伝えたいと思うようになったら、少しずつ人の足は止まるようになりました。

書の魅力はまず母親の書のような、潔さ。一発で書き上げなければならない、そして後戻りできない緊張感。白と黒だけで表現するシンプルさ。そして書はそこに言葉があること。人は言葉によって大きく人生を変えることができます。その大きな言葉の力をギュッと文字として閉じ込め、筆によって昇華したのが書。

僕自身の力は信じられなくとも、書の力を信じることで前進することができました。それからは、僕の書で涙してくれる人や感動の声が世界中から届くようになりました。書の魅力と僕の個性が調和した時、世の中に新しいものを創ることができたのです。

●たけだ そううん●

書道家。1975年、熊本県生まれ。3歳より書道家である母・武田双葉に師事し、書の道を歩む。大学卒業後、NTTで約3年間の勤務を経て書道家として独立。音楽家、彫刻家などさまざまなアーティストとのコラボレーション、斬新な個展など、独自の創作活動で注目を集める。

2003年、中国上海美術館より「龍華翠褒賞」を受賞。同年、イタリア・フィレンツェにて「コスタンツァ・メディチ家芸術褒章」を受章。

NHK大河ドラマ「天地人」、映画「春の雪」、「北の零年」、愛知万博「愛・地球博」のグローバルハウス各ブースほか、数多くの題字を手がける。また、テレビや講演会、セミナーなどへの出演も多数。

著書に「ひらく言葉」（河出書房新社）、「書の道を行こう～夢をかなえる双雲哲学～」（PHP研究所）、「世界一受けたい「生き方」の授業」（三笠書房）、「武田双雲 戦国武将を書く」（びあ）など多数。

公式ホームページ <http://www.souun.net>

目次

書の魅力 武田 双雲 1

心の時代なりせば 名倉 庸一 2~4

～時代を見つめる中で、眼に見えないものを大切に～

心の時代なりせば

～時代を見つめる中で、眼に見えないものを大切に～



名倉 庸一

●なぐら よういち●

1930年、愛知県西尾市生まれ。愛知教育大学附属養護学校教頭、愛知県教育委員会主査、西尾市立矢田小学校長、愛知教育大学附属岡崎小学校副校長、西尾市立鶴城中学校長、西尾市教育委員会教育長、東海北陸都市教育長協議会会長、全国都市教育長協議会副会長などを歴任。教育文化賞、教育功労文部大臣賞、瑞宝双光章などを受賞、受章。

1 世相への嘆き

世の中が経済的に豊かになり、機械文明の発達も日進月歩である。コンピュータはたちどころに統計、運勢、写真の合成、歴史の再現などをはじき出してくれる。

携帯電話の発達はあらゆる情報を提供し、悪用する者が後を絶たない。乗り物はおろか、銀行の窓口、駅の改札口にいたるまで人を待たせないですむような配慮がなされている。どれを取り上げてもスピードアップされた時代に突入してしまった。

世の中の変遷も余りにも激しく、待っていてはとり残され、不安に襲われるような世相になってきた。こんな時代に応じて登場したインスタント文明の落し子として、そこには自分の欲望と他人の間に時間も距離もおくことができないジェネレーションが生まれた。

新聞を賑わす非行、犯罪の多くは知能犯というより、むしろ一時の衝動を抑えることのできないままに突っ走る人々の姿があるように思われる。しかも極めて短慮であり、自己中心的な動機が見られるのである。

この荒廃した人心や価値観、生きざまを放置しておいてよいものかと模索する日々である。

2 母の小さな所作から

母の生前（81歳）、陽あたりのよい廊下で、家内が趣味で作った抹茶茶碗で、母にお茶を点でて制作談話をしたり、四方山の話をしたりが一日の生活の一齣ひとこまであった。

数日は「よくできたね。呑みやすいね」とか、「貴女も腕があがってきたわね」と誉めたり、激励したり、感想を言ったりして、おだやかに呑んでいるが、そのうち母は茶



洪のついた古茶碗を順に出してきて「これで点でて」と言っ
て、慈しむようにゆっくりとお茶を味わっていた。

「お母さん、そんな茶洪のついたものだけでなく、他の綺麗なお茶碗を使ったら」と家内が言うと、「これはお父さんとよく呑んだお茶碗だから…」と言って呑み終えてからも両手で茶碗を撫でたり、高台あたりを眺めたりしながら言葉少なめに何かを想うしぐさが見受けられ、いっこうに古茶碗を取り替えようとはしなかった。

家内は「私のつくったお茶碗が気に入らないのかしら…」と愚痴をこぼしながらその情景を話してくれた。私は「そうではないよ」と即座に否定し、家内と話し合ううち…。

母と嫁の二人で陽あたりのよい場所で、仕事に追われることもなく、静かに抹茶を呑む雰囲気は老いた母にとってすこぶる安堵するひとときであったにちがいない。

さらに、遠い日、父とともに抹茶を嗜んだ茶碗であって、母にとっては遠い日々の思い出がいっぱい詰まっているのである。他の者からみれば、うす汚いように見えても、母にとっては亡き夫と語り合える最も幸せなひとときであったと思う。

戦後、校長をしていた父の給料では生活が精いっぱい
の頃で、姉の結婚、私の大学進学、弟妹の高校進学などさま
ざまな問題をかかえ、抹茶を呑みながら相談するのが両親
の生活のリズムであった。だから、それらの茶碗には当時
の苦しみ、喜び、悲しみ、悩みが充満しており、その一つ
ひとつを取り出して、母は静かに回顧していたのであろう。

したがって、父の形見ともいべき茶碗は、母にとっては他のものと比べることのできない高価な価値をもったものであったに違いない。老いた母が陽のあたる場所で、これらの茶碗を使うことは、亡き夫との声なき対話で

あり、母にとってはかけがえのない幸せであったと思われる
てならない。

それは世界に二つとないものであり、母にとってどんな
に多くのお金を出しても買うことのできない価値をもっ
た大事な宝ものであったのだろう。

父はもちろん、母も今はいない。いまだかつてない物質
的繁栄の中で、日本人は「豊かな生活の時代がきた」と誰
もが「金やもの」の世を謳歌し、海外で豪遊し、他人との
生活レベルの比較の中で競いあって生きてきた。そして、
高価な生活用品の充実で満足の笑みを浮かべて、はしゃい
だ日々を送ってきたのも事実だ。

確かに、機械文明の発達はすさまじいものがあり、金さ
え出せば、どんな便利なものも、高価なものも手に入る時
代である。世界も狭くなり、家庭内には自家用車、電化製
品が満ち溢れ、インターネット、携帯電話の普及もすごく、
これらを悪用する者すら出ている始末である。

日本人は結局、眼に見えるものの多さ、新しさ、大きさ、
立派さ、得点が高い低いとか、役に立つ、立たないなど外
見ばかりを気にして駆けた60年史であったと言っても過
言ではない。

眼に見えない、そして比べることのできない「心の幸せ」
や「自分しかもっていない価値」を蔑ろにし、他人の迷惑
など考えない利己的な考え方にいつしか流されてきてし
まった。「金ともの」は世界に君臨する経済大国を創り上
げてきたが、現在の不況、青少年の非行、全てのものの改
革に気づいたとき、失われていたのは日本人の「心」であ
り、「価値観」であった。

「金ともの」は山
頂近くに至ってい
るのに、心だけは
遙か裾野に低迷し
ている実態が浮き
彫りになり、実に
アンバランスな状
態になってしまっ
た。

人間にとって本
当に豊かな生活と

は、いったい何を指すのだろうか。贅沢な生活様式とい
うにしてはあまりにも人の心がそれに伴って豊かになっ
ていない。やはり、豊かな生活は、かけがえのない価値を多
くもつ生活を指すのではないだろうか。

国際化したこの時代に、世界の人々から信頼と尊敬の眼
で見られるような人間としての道や自己を高める努力が
求められるのである。

美しい安心して住める国、風格ある風土、公衆道徳のま
もられる国を生み出していくことが、これからの学校・家
庭・社会が担っていく役割である。母の小さな所作から気
づいたかけがえのないもの、即ち大切なものは眼に見えな
い、肝心なものは心の眼で見なくてはと思うのである。

③ 美しい家族愛

西尾市の中学2年生のある女子生徒が図1のような短文
を寄せてくれた。



おばあちゃんの写真を胸に

「おばあちゃん、富士山登ったよ。雨が降っていたけどがんばったよ」
手を合わせ、心の中でそう叫んだ。天国にいる祖母に届くように。
それは学校から富士登山をして立志の式をすることが決まった日、「おばあちゃん、今度ね、富士山に登るんだよ」「富士山かあ、行ったことないなあ。いっぺん行ってみたいなあ」
遠くを見るように目を細め、つぶやいていた祖母。
その祖母が7月31日に亡くなった。その夜、孫7人で心を込めて手紙を書いた。祖母にしか読むことのできない手紙を。
7人でそっと菊の花といっしょにお棺の中に入れた。
私はこう書いた。
「おばあちゃん、富士登山がんばってくるからね」
出発の朝、私は祖母の夢をつかえるために祖母の写真を

持って家を出た。
登り始めたとき、私は登山を成功させることだけを考えていた。祖母のためにも、自分のためにも。
しかし、途中から自分が登るのに精いっぱい、祖母のことは忘れていた。
富士登山は成功した。友だちと声をかけ合ったから。
でも、私が登りきれたのは、それだけではなかったように思う。
富士登山の夜のミニ立志の式で、私は思いきって、祖母のことをみんなの前で話した。話したいことはいっぱいあった。
でも少ししか話せなかった。言葉になって出てこなかった。
この富士登山、今までとは違った自分を出すことができた。
それは祖母といっしょに登ることができたからだと思う。
そして、今、私は祖母といっしょに帰ってきた。
祖母の夢を叶えて。

図1 短文(おばあちゃんの写真を胸に)



私はこの女子生徒のすばらしい心情に、心打たれて絶句したのであるが、同時にこの三世代の日ごろの生活を想像することができた。祖父母、両親、子どもたちの織りなす温もり、労わり、愛情が豊かな感性を育てたと思う。

心の陶冶はまず家族の絆からスタートするものと考えている。

4 こんな父が大好きだ

私が小学校長のときである。両親が一級のろうあ者のご家庭があった。

『生まれた長男に言葉を親として教えねばならない…』この両親は悩み考えたすえに、母親が長男をつれて人の寄る店などに出かけて、人の声を聞かせようとした。来る日も来る日も出かけてくる親子のようすに気づいた人たちが交替で子供をあやしたり、言葉かけをしてくれた。

夜は父親の膝の上でテレビのアナウンサーの声を聞かせ、言葉の発達のために涙ぐましい努力をしたのである。この両親の生きざまに子供は順調に育たぬはずがない。長男は5年生のとき図2のような詩を書いた。

この詩を手にした私は泣いた。早速この子を読んで家族のことを聞き、手話のできる人を通して子育てのようすを知った。そして、その子は両親と語り合いたいと手話の勉強中だといい、『妹の言葉はぼくが教えました』と胸を張って両親をたたえてくれた。それから、長男は獣医に、妹は歯

父

ぼくの父は耳も口もわるい
話すとき 手を使う
でも大工の仕事をしている
よく働く父
日にやけた黒い顔
汗を流して仕事をする
日曜日は休みなのに
汗くさい体ががんばる
家がどんどん建っていく
こんな父が大好きだ

図2 詩(父)



の技工士、父は宮大工となり、家族4人で手を使って話をする幸せを楽しんでいる。

なんと素敵な家族であろうか。健常である私たちに真摯に生きることを教えてくれた。零歳児からの教育を提唱する本市の源は、この家族のような生き方にあるのである。

5 天に星、地に花、人に愛

ある晩秋、本市にある平原のひろの滝周辺を散策した。静かな黄昏の中、葉を落とした木に数個の柿の実が落日に輝いていた。持ち主が小鳥たちのために残しておかれた心やさしい残実であろうか。

小鳥たちあと数個の柿のみぞという俳句が浮かんだ。これこそ日本人の本当の心であると思う。落葉樹は先の台風によって多くの葉を落とし、どこか明るくなったようであった。裸の木や裸になった田に加齢した私が晩秋の光の中にあり、なぜか安息のときが流れた。

この里山の入口に私が書いた「天に星、地に花、人に愛」の石碑が建っている。ここにはいつも清浄な空気が流れ、滝の水音も聞こえる。そして夜は満天の星空が見られる。さらに春には淡墨桜のうすすみざくらや草木の花が降り注ぎ、夏にはゲンジボタルが夜空を乱舞する素敵な場所である。

ふる里の自然を愛する者は、また自然から愛の恵みを受ける相互の関係がある。現代のような金とものに執着するだけの生活が豊かな生活とせず、こうした自然を社会全体の奉仕活動で保全して、市民の散策の場所に提供すれば家族に団欒が生まれ、豊かな感性が育つと思われる。

美しい自然、品格のある街づくりをめざし、市民参加の奉仕作業が急務となるときが到来したと思う散策であった。